

# Carson McCullers と孤独の探究

——*Clock Without Hands* をめぐって——

岡 本 貴 太 郎

## I

Carson McCullers (1917—1967) の文学の基調をなしているものは、彼女の処女作 *The Heart Is a Lonely Hunter* (1940) からすであきらかな如く、彼女の人間への深い「孤独」である。それはあらゆる人間の「現存在」にまつわるところの「孤独」である。孤独な人間存在は、他との一体化・集合体への同一化をはかろうとする。しかしながらその communication の挫折によって、いわゆる連帯感の喪失した人間存在の「孤独」は一層深められ、grotesque なものになり、暗い色調を帯びて drift してゆくほかない。そしてそこに醸しだされる絶望的な「虚無感」は死につらなるものであり、生きている自己の絶体的な「孤立感」である。つまり McCullers によれば、孤独とは生の本質的な条件であって、人間はお互にその魂をわかち合うことのできない孤独な存在としてとらえられている。

かようにして McCullers の作品に描かれる孤立の状況における登場人物は、一層その孤独さと grotesque さを露呈してくることになる。したがって作品に異様な雰囲気にあたえ、そしてそこに醸しだされる「孤独性」の暗い色調は一層強調されてくるのである。かくして McCullers の描く「孤独」は、深い pessimism に閉された、はてしない「虚無」につながるものであり、やがて最後の作品 *Clock Without Hands* (1961) における主人公 Malone に象徴される死の世界へと深まってゆくのである。

## II

*Clock Without Hands* の物語の背景となっているのは、従来の作品と同じくアメリカ南部の紡績工場のある小さな町であるが、この作品においては、従来より作者の客観的なかつ緻密な描写がうかがわれる。そしてさほどの grotesque さはなくなり、また作者がこれまで描きつづけてきた特異な situation とは異なり、より日常的・現実的なものとなって大きな魅力と作品のもつひろがりを見せている。また彼女の作品にはあまりみられなかった白人対黒人の超えがたき対立、すなわち人種問題を、いわば社会的・政治的現実を南部の伝統的な日常生活のなかにとらえられ、南部の過去がもつ現代への重みがとりあげられている点で、彼女の作品のなかで最も南部的なものであるということができよう。

Death is always the same, but each man dies in his own way. For J. T. Malone it began in such a simple ordinary way that for a time he confused the end of life with the beginning of a new season.<sup>1)</sup>

作品の冒頭において、このように描かれるこの物語は、主人公 J. T. Malone の死に至る「閉された」世界を暗示するものであり、表題の「針のない時計」で象徴されるように、医師によって白血病 (leukaemia) と診断され、あと1年ないし15ヶ月の生命であると宣告された死の影におびえる Malone の「孤独」な世界が描かれているのである。この「針のない時計」が象徴するように、それは現実世界の虚しさであり、人生の虚妄と不条理を示すものにほかならない。すなわち 'He was a man watching a clock without hands.'<sup>2)</sup> と描かれる時間の喪失は、「生命」・「宇宙」の解体であり、彼は現実の裂け目から時間の解体した死の深淵を見つめて生きてゆかねばならない恐ろしい

1) Carson McCullers, *Clock Without Hands* (Houghton Mifflin Company, 1961), p. 1.

2) Ibid., p. 25.

孤独な状況としてとらえられる。

Each morning that summer he had waked up with an amorphous dread. What was the awful thing that was going to happen to him? What was it? When? Where? When consciousness finally formed, it was so merciless that he could lie still no longer; he had to get up and roam the hall and kitchen, roaming without purpose, just roaming, waiting.<sup>3)</sup>

このような孤独な人間存在の状況は、ひとり Malone だけではなくて、すべての人間に共通するものであって、われわれはこの Malone の映像に、現代人の生きる孤独な状況の象徴を読みとることができるのである。

### III

*Clack Without Hands* には薬剤師 J. T. Malone を中心に、その友人であり古い南部人の誇りと偏見をもったかつての下院議員である老判事 Clane, その孫 Jester, そして秘書である白人と黒人との混血児の青年 Sherman らの主要人物が登場するが、彼らはいずれも「孤独」に悩む人間として描かれ、生きることの「悲哀」とそこにおのずと醸しだされる暗い「絶望」をいだいて drift しているのである。

85才の老判事 Clane は古い南部の誇りと偏見をもった人物であり、黒人に対する白人の優越意識と人種差別を当然のことと考えている。しかしこのような彼も Malone とは違った理由から深い孤独感をいだいており、そのため薬剤師 Malone と日常生活において、きわめて親しい交際をするようになる。Clane の妻はいまは亡く、そして弁護士であった一人息子 Johnny は、彼の扱った裁判事件が予想もしなかった結果、ピストル自殺をとげてしまい、老判事はその孫 Jester と、それから息子が関係していた裁判事件につながり

3) Ibid., p. 113.

のある、すなわち Johnny が同情していた女性と、彼女を犯した黒人の間にできた「青い眼のニグロ」の青年 Sherman を秘書に雇って暮している。そして老判事はいまだひとりの肉親である Jester をこよなく愛しているが、その愛情は世代のちがいもあって、一方交通であり Jester には通じない。この Jester は母とも生まれるとすぐに死に別れ、青年期の不安と孤独に悩んでいる17才の若者である。Jester に裏切られた老判事は negro の青年 Sherman に愛をそそぐようになるが、Sherman の孤独な心はこれまた老判事の気持をまったく受け入れない。一方 Jester は同じ年頃の Sherman と親しくなり愛するようになるが、Sherman は自尊心が強くどこことなく高慢で自ら夢想にふけりがちで、Jester の友情を受け入れないどころか、故意に侮辱して Jester の心を傷つけるのである。そして Sherman 自身は両親の正体もわからない身で、その名前も教会で捨てられていたというので、Sherman Pew（教会の席）と名づけられている。これらの登場人物は、すべて深い孤独に悩む人物として描かれているが、これら McCullers の描く孤独な人間の映像のうちに、現代人の孤独に苦悩する人間像——そこにうかがわれる人間存在の悲哀——をわれわれは感得することができるのである。

Malone の身体はすっかり弱っていたが、彼はじっと落着いていることができず、あてもなく町をさまよい歩くのであった。

On these walks he had the bewildered look of an absent-minded person who seeks something but has already forgotten the thing that is lost.<sup>4)</sup>

このような Malone は孤独からの「救い」を求めて、生と死の非現実性に悩まされて、教会を訪れるのであった。すなわち彼は孤独の救いを第一バプティスト教会に求めるのであった。四月の初めの日曜日に、ワトソン博士はすばらしい説教をし、その朗々たる声は教会の円天井に反響し、スティンドグ

---

4) Ibid., p. 9.

ラスの窓からは色彩豊かな光が会衆の上にそそいだ。Malone は非常に感動したけれども、教会を出ると死は依然として不可解な神秘的なものとして残り、何だか欺されたような気がするのであった。もはや宗教も彼の孤独の「救い」とはなりえず、*The Heart Is a Lonely Hunter* において、かつてはキリストを信じ、伝導者になることさえ考えたことのある Blount、いまは亡き母に想いを寄せ、‘He wondered again how she would have felt about his giving up church and religion.’<sup>5)</sup>と瞑想する Brannon、“He done lost God and turned his back to religion.”<sup>6)</sup>と娘 Portia の語る Copeland、そしてまた “I don’t believe in God any more than I do Santa Claus.”<sup>7)</sup>とつぶやく Mick をわれわれは想起するとともに、彼らの「孤独」には、現代人の宗教をそして「神」を棄てたことに起因するものと考えられるかも知れない。

また教会からの帰り、Malone はあてどもなく町をさまよううちに、

When he took a short cut through an unpaved alley the steps no longer sounded, but he had the uneasy sense of being followed and glimpsed a shadow on the wall. He turned so suddenly that he collided with his follower. He was a colored boy that Malone knew by sight and in his walks he seemed always to run across him.<sup>8)</sup>

とふと出会った negro の青年 Sherman の印象は、無気味で何となく恐怖感と不安をいだかしめるのであるが、Malone の荒廃した内的な世界を描くものであり、Malone は ‘He felt that those strange eyes knew that he was soon to die.’<sup>9)</sup> ほどこの Malone の孤独な眼は、negro の青年のふしぎな

5) Carson McCullers, *The Heart Is a Lonely Hunter: The Ballad of the Sad Café* (Houghton Mifflin Company, 1951), p. 173.

6) Ibid., p. 191.

7) Ibid., p. 192.

8) Ibid., p. 11.

9) Ibid., p. 12.

眼の直観力をふしぎと感じとっているのである。そしてその後、彼は Malone の神経をとくにいらだたせる存在となるのである。‘The terror of consciousness washed over his tired body and limpened spirit.’<sup>10)</sup> Malone のこのような孤独と空虚な心にいたましくキツツキの音が響くのであった。

A bright woodpecker pecked hollowly at a telephone pole. The afternoon was silent except for the woodpecker.<sup>11)</sup>

何時襲ってくるかはわからないが、必ずしかも間もなくやってくる死を、じっと待っている Malone の孤独感は、日常生活から彼をまったく切り離してしまって、虚無の状態に押しやってしまうのである。それは「虚無」というよりは「空無」といったほうがよいかも知れない。死を宣告されながら、いつともしれず時間の経過のない「空無」の世界である。この Malone の内向する孤独は Singer (*The Heart Is a Lonely Hunter*) のそれに似たものであることをわれわれは感知するのである。

南部の保守的な伝統主義者であり、旧い南部の復興をねがう老判事 Clane は、南北戦争以前の紙幣を集め、その価値回復を夢みるといったコミックな面もあるが、その彼は孫 Jester に南部の旧い家柄の紳士の心がまえを執拗に説き聞かせるのである。

“You must take the word ‘reactionary’ literally these days. A reactionary is a citizen who *reacts* when the age-long standards of the South are threatened. When States’ rights are trampled on by the Federal Government, then the Southern patriot is duty-bound to react. Otherwise the noble standards of the South will be betrayed.”<sup>12)</sup>

10) Ibid., p. 114.

11) Ibid., p. 157.

12) Ibid., pp. 27—28.

老判事のこのような説得は旧い南部人の典型を示すとともに、若い世代の Jester にはとうてい共感を呼び起すことはできない（そして老判事のこのような考え方は、後に起る negro の青年 Sherman に対する残虐なリンチを容認することにもなる）。このようにいつも孫を説得しようとしては、いつも裏切られ孤独を味わねばならない彼はまさに悲劇的な存在であった。

It was true that when Jester talked of the mixing of races his stomach seemed to churn and all appetite had left him. He opened and poured the unaccustomed wine, then drank as soberly as if he had been drinking at a wake. For the break in understanding, in sympathy, is indeed a form of death. The Judge was hurt and grieving. And when hurt has been caused by a loved one, only the loved one can comfort.<sup>13)</sup>

この「愛するもの」と「愛されるもの」との関係は、評者によってよく引用されるところであるが、それは *The Ballad of the Sad Café* において、McCullers が作中自ら「愛の理論」として語っている。それは愛における一方交通性を語るものであり、すなわち「愛するもの」と「愛されるもの」とは、本質的に二つの異った世界に住むものであって、愛するがゆえに孤独を味わねばならないという皮肉な真実が認識され、愛は孤独の認識にすぎないという、愛そのもののうちに孤独性が宿るものとする徹底した彼女の孤独観をわれわれはうかがうことができるのである。

結局はただひとりの身寄りである孫 Jester の気持を理解しえず、裏切られた老判事は negro の青年 Sherman に心を向けるのであるが、これまた Sherman の孤独な心は、老判事の気持をまったく受け入れないどころか、優遇されているにもかかわらず、冷笑的な態度をとっている。あげくのはて

---

13) Ibid., p. 33.

糖尿病の注射液の代わりに、水を注射するということまでやって彼もまた老判事のもとを去ってゆく。南部の「過去」を背負わされた老判事の姿態はまことに悲愴であるが、「愛するもの」の宿命として、McCullers がこれまで描いてきた孤独なかたちは、それを見事にあらわした Amelia (*The Ballad of the Sad Café*) と、この老判事とのちがいに示されているように、そのかたちをかえはじめたのであろうか。そのかわりに老判事に迫ってくるのは「過去」のもつ罪である。

老判事の秘書として雇われている negro の青年 Sherman は正体も不明で grotesque な人物である。老判事は自分の息子の裁判事件に関係のある青年として、いわば自殺した息子 Johnny を思い起す要因として、Sherman を自分の邸宅で使って優遇し愛している。しかし Sherman はどことなく高慢で、主人の老判事とその孫に対して、たえず反抗的な態度をとっている。そして一面彼は非常な夢想家で、自分の母が音楽家の Marian Anderson であると勝手にきめこんで、その彼女に思慕の手紙まで書こうとする。こういう性格から彼は音楽、特にピアノが得意なことから音楽家として独立しようとする。そしてまだ見ぬ母への思慕の情を燃やすのである。

He would pick out one woman after another who had a gentle touch and a soft voice. Is this my mother? he would think in wordless expectancy that ended always in sorrow.<sup>14)</sup>

Sherman のこのような夢想も結局ははかなく、孤独感は一層深まってゆくのである。そして彼の性格にはなにか異常なところがあり、その行動にも不可解で最も grotesque である。

以上述べてきたようにこの作品においても、McCullers は従来の作品において描いてきた彼女の「孤独」のテーマを、Malone, Clane, Jester, Sherman の四人の主要人物を通して描いたものであるが、そのうち最も孤独な

14) Ibid., p. 78.



人間の映像は、死の宣告をうけている Malone であることは言うまでもない。それはもはや McCullers がこれまでの作品で描いてきた「愛するもの」と「愛されるもの」との間に生じる孤独ではなくて、<sup>15)</sup> ‘…but little by little he had lost his own self.’ すなわちそれは自己を見失った孤独であり、それから逃れるために彼は自己の「存在の意義」を探求せねばならなかったのである。40才の今日まで日常性の世界に埋没し、ただ何となく生きてきた彼にあって、いまにして死の影に生きるこの限界状況において、自己の存在を確認するのであった。この意味において、この作品は Oliver Evans も ‘In *Clock Without Hands* she is concerned with the loneliness that results from a lack of rapport with the self. The search for self is the theme of her latest novel.’<sup>16)</sup> と指摘しているように、主人公 Malone の自己探求は人間の行動に対する倫理的選択 (moral choice) と倫理的参加 (moral engagement) にあると考えられる。すなわちサルトルのいう実存主義哲学における参加と選択を通して自己の正体 (identity)<sup>17)</sup> を獲得することにある。

やがて negro の青年 Sherman は老判事の邸宅を出て独立し、白人居住地区に移り住むようになる。ところがその地区に住む白人たちは、それは白人への侮辱的な行為とみなして大いに怒り、彼らは Malone の店を集会所として借り、ひそかに Sherman の家に爆弾を投げこむというリンチの相談をする。老判事はそれを止めさせるところか煽動するのであった。

---

15) Ibid., p. 149.

16) Oliver Evans, *Carson McCullers: Her Life and Work* (Peter Owen, 1965), pp. 172—173.

17) われわれはこのような自己の正体 (identity) に苦悩する典型的な人間像を、Faulkner の *Light in August* の Joe Christmas にみることができる。またこのような孤独な人間像は、この作品の主人公 Malone のほか Jester, Sherman とともに、最初の小説 *The Heart Is a Lonely Hunter* の Mick, *The Member of the Wedding* の Frankie にみられ、Frankie は Mick を発展させた人物として、*The Member of the Wedding* の中心人物となって描かれている。

“Fellow citizens, are there no zoning laws in this town? Do you want coal-black niggers moving in right next door to your house? Do you want your children crowded in the back of the bus while coal-black niggers sit in the front<sup>18)</sup>?”

老判事はこのようにみんなの感情を煽りたてた。その夜は暖かかったが、円くて黄色い月が、Malone には悲しみと寒気を感じさせるのであった。さて誰が爆弾を投げるかということになり、そこに集ったある者の提案で、くじを引くことになったがその結果、偶然にも Malone がそれを引いてしまった。“I am too near death to sin, to murder. …I don’t want to endanger my soul. …But if I have one, I don’t want to lose it.”<sup>19)</sup>と自分の良心と魂をけがすようなことはやらないと拒絶する。自己探求に苦悩する Malone は、ついに黒人に対するリンチを、人々の前できっぱりと拒絶するのであった。この行為は実存主義でいうところの二者選一（自らの主体性における）の選択によって、社会に参加することであり、すなわちそれは自己の選択(決断)によって、社会に参加することであり、そのよき選択によって倫理的意義をもつものである。ところがその隣の家に住んでいるという Sammy Lank という男が現れて自分がそれをやると申し出た。

ところで店の調剤室にひそかにもぐりこんでその話を聞いていた Jester は、すぐさま Sherman の家にとんで行き、彼にすぐに家を出ることを警告するのであった。しかし Sherman は多大の犠牲を払って、家具やピアノまで買い求めたので、今更家をたちのくことはできないと言って退去しない。

“I have made my decision. So I am going to stay right here. Right here. Bombing or no. Besides, why the fucking hell do you care?”<sup>20)</sup>

18) Ibid., p. 223.

19) Ibid., pp. 224—225.

20) Ibid., p. 229.

やがて家のなかで、ピアノを弾き、歌っている Sherman の喉もとに爆弾は命中し、彼は倒れ、そして彼の家は燃えてしまった。結局彼は poor whites の暴徒の手によって殺されてしまったのである。われわれは McCullers がここで白人と黒人との問題を、たんなる社会問題として描いているだけではなくて、彼女も自ら語るように、普遍的な人間の魂の善と悪の問題として取り上げていることを読みとることができるのである。

Sherman の家が爆破されて彼の殺される描写に、われわれは McCullers が従来の作品において描く grotesque な人物と、もう一つの特徴である暴力と死を思い出すことができる。それは Singer (*The Heart Is a Lonely Hunter*) の自殺、Penderton 大尉の Anacleto (*Reflections in a Golden Eye*) の射殺を想起するとともに、この作品における Sherman の殺害、そして Malone の死は、死によって孤独からの脱出をはかる限界状況における人間の「現存在」の孤独を浮き彫りする McCullers の徹底した態度をわれわれは感得することができるのである。なおこの作品において、grotesque なものが姿を消しかかったように思われるが、暴力と死はさらに烈しさを加えてわれわれに迫ってくるのである。

ところでこの Sherman の悲劇は、折角警告に来てくれた Jester の忠告にもかかわらず、いわゆる誇り高き黒人<sup>21)</sup>として頑固に「過去」を拒絶したことから起ったものである。しかもこの Sherman の拒絶は、白人の身勝手な主張と行動に対する抗議であるとも考えられる。そしてこの事件を新聞のニュースで翌日知った老判事 Clane と孫 Jester との反応にわれわれは注目するのである。すなわち老判事は Sherman が連れて行かれた病院を訪れて、埋葬費として五百ドルを渡しはするが、Sherman の死体もみとどけずにそそくさと帰ってしまうのである。一方 Jester はひそかにリンチの加害者 Sammy Lank に、父親が自殺に用いたピストルで復讐を企てる（その復讐は結局挫折に終ることにはなるのだが）。ここでわれわれはこの老判事に旧い

21) この滅びゆく不思議な誇り (pride) と沈着 (calmness) をもった登場人物をわれわれは Faulkner の作品にうかがうことができる。

南部人の精神と行動と、そして新しい世代に属する Jester の行動の未来に、McCullers の暗示をみることができるのである。Sherman が殺されるという事件によって、ともに孤独な Malone と老判事 Clane は、親しく交際し、お互いにその孤独から逃れるために訪問し合っていたが、Sherman のリンチによって、二人の行動の選択は相反するものとなって決別するのである。

#### IV

この物語の終結部において描かれる老判事 Clane は、ある一種の狂気的とも言える姿態を呈してくるのである。白人と黒人の共学が連邦政府によって認められると、彼はこれにヒステリックに反対して、その演説をラジオを通じて行うのであるが、それを聞いている者にとっては何を言っているのかわからないほど激情的なものになってくる。それは死に瀕した老いたる南部という象徴であるとともに、旧い南部の死滅のうめきになていえると言えよう。

一方 Malone の内向する「孤独」な世界は、やがて死へと、「自由」な世界へと志向してゆくのである。すなわち McCullers の描く「孤独」からの脱出は、死によって「自由」を獲得するものであり、彼は良心的な行動の結果、平安な心をもって妻たちに見守られつつ息をひきとるのである。

A strange lightness had come upon his soul and he exalted. He looked at nature now and it was part of himself. He was no longer a man watching a clock without hands. He was not alone, he did not rebel, he did not suffer. He did not even think of death.<sup>22)</sup>

自分の孤独について、もはや考えなくなり、自己の存在すら見失った Malone の世界は、「虚無」というより「空無」の世界であるが、これはまさしく決断（選択）をもって、良心的な行動（Sherman へのリンチの拒絶）の結果、かちえた彼の静かな心の平安である。この Malone の姿に、われわ

22) Ibid., p.236.

れはあの荒廃した、いまにも倒れそうになった酒場の二階の窓から、疎外された町の通りを眺める Amelia (*The Ballad of the Sad Café*) の姿よりも、humane なものを感じることができるのである。またこの物語の結末に示されるこの恐ろしい孤独の深淵の暗闇に、一種のあきらめにも似たこの静けさは、かつて McCullers は *The Heart Is a Lonely Hunter* において、Brannon に依然として、心のやわらぐことがなく、不安といわれない恐怖を感じながらも、つまり「光と闇、痛烈な皮肉と信仰との間の中有に迷って」いながらも、「朝の太陽」を「心しづか」に待たせたが、あの「静けさ」をわれわれは想起できるのである。そしてまたこの「静けさ」は McCullers 自身がパーキンソン氏病という不治の病にかかりながら、その病床にあって、人間を見つめる彼女の「静けさ」に通じるものであり、しかもそのうちにあつて、彼女の人生への峻厳な態度をわれわれは把握できるのである。